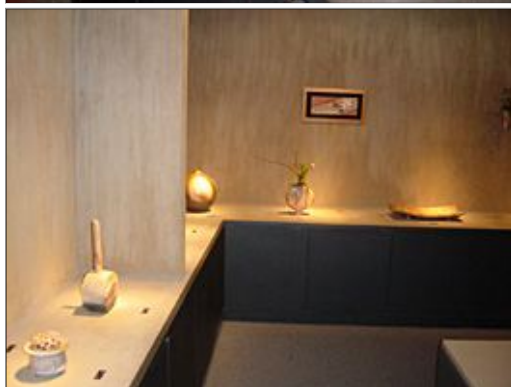
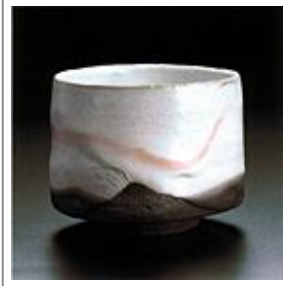


萩焼の 粹  
大和保男展

萩焼の粹  
大和保男個展

2002年  
9月27日(金)~10月3日(木)

彩陶庵本館ギャラリー





## 大和保男試論 懸命の作陶

榎本 徹（えのもと とおる）  
岐阜県現代陶芸美術館館長

「炎箔」心地よい言葉である。大和保男の仕事の中心は、この炎箔である。炎箔の炎は塩でもあり、塩を主成分とした釉薬である。塩を主成分とした釉薬は、萩焼でこそ珍しいが、\*釉薬としては珍しいものではない。ヨーロッパの雑器窯では、窯が高い温度になると、ひとつかみの塩を窯のなかに投げ入れるということがよく行われており、それによって製品の強度が増すなど実用性を高めたのであった。このように塩釉はどちらかといえば、雑器に用いられるものであった。この塩釉を四角く箔状にほどこし、塩と炎をかけて、炎箔という優雅なことばをあたえたのである。ここで用いられた箔は、日本画などに用いられる金箔に直接通じる効果を受け、作品を華麗なものとしており、大和保男の陶芸の根幹を形成しているのである。

大和保男の作家としての遍歴は、戦後日本の陶芸家として、ある意味では典型であった。大和松緑という山口萩焼を興した陶工の孫として生まれ、幼くして作陶の修行をしたが、自我に目覚める頃、すでに決められたかのような進路に反発し、しばらくは家を離れて暮らす。やがて家に帰り、家業に専念、さらに、光風会、日展などに作品を出すようになる。家業への反発と公募展への出品、このことは一見別なことのように見えるがその根底ではつながっている。20代から30代にかけての展覧会出品作の一群の作品は、大和保男という作家の彷徨の軌跡を映してあまりある。先鋭的に見える作品の底にある激しい焦燥、さまざまなスタイルの試行に見える大いなる迷い、これらの集積としての初期作品群を作家は大切に保存している。それも大和保男である。

そして昭和50年の日本伝統工芸展初入選、このころから陶壁の仕事を手がけ始める。日展から伝統工芸へ、器から陶壁へ、大和保男という作家の真の意味での誕生である。その手みやげともいえるのが「炎箔」であった。大和保男という作家は、基本的にはデザイン的な仕事を得意とする作家である。その意味で、陶壁というジャンルは彼にむいていたというべきであろう。しかし、陶壁を手がけて、素材としての土、とくに大道土の処理の困難さと闘うことによって、土という素材に対する目が、より深いものとなったのではあるまいか。このころから、土の質感に対する表現が、格段に進化したように思えるのである。そして、炎箔は、生来のデザイン感覚と、土の素材感への深化の総合から生まれたものということができるだろう。

炎箔をひっさげての伝統工芸での活動は、大和保男という作家をひとまわりもふたまわりも大きくした。しかし、それにともない責任も彼にかかってくる。たとえば、日本工芸会の山口支部の幹事長である。私には、大和保男という作家にとって必ずしも、幹事長という職が据わりのいいものには思えないのであるが、これも巡り合わせというものであろう。誤解をおそれずにいえば、少しまじめで、そして一生懸命の人である大和保男という人にはむかなかたのではあるまいかと思うのである。しかし彼はその職を懸命につとめたのである。作家にとって団体は両刃の剣である。とくに役職に就いたものにはその色合いが濃くなるように思えるのである。ある年齢になれば役職を引き受け、後輩の指導にも心を配る必要がある。しかしそれらによって失われる時間もばかにならないものがあるのではなからうか。ものをつくらなければ

ならない作家にとっては、その意味はさらに大きい。そして今年その役職から解放されたのである。大和保男の2度目の誕生である。

多くのつくりたいもの、いやつくらねばならないものがあった。そしてその思いがままならない日々が続いていた。そして今、いよいよその思いを実現する日が来たのである。さまざまながらみから解放されたのである。俗な言い方をすれば、大和保男は吹っ切れたのである。もちろん今までも懸命に制作を続けていた作家が、突然全く違う作品だけをつくるはずはない。しかしそこにはこれまでとは違う大和保男が立ち現れるにちがいない。私たちは幸運な時をむかえている。ひとりの作家の転機をまのあたりにできるのである。私はとくに茶碗に注目している。それは、作家が「これからは造形だ」と決心しているのが伝わってきたからである。そして茶碗こそ、造形力が端的に現れるジャンルだからである。大和保男という作家は、炎箔に見るように旧態依然の萩焼にこだわるような作家ではない。萩焼を超えて、もっと高いところから茶碗を見ている作家である。私は完成直前の作品を見ることができた。おそらく個展では白い釉がかけられた、スケールの大きな茶碗を見ることができるだろう。しかしそれがゴールなのではない。まさにそれが大和保男という作家の、第二のスタートなのである。

\*塩は厳密な意味では釉薬ではない。塩の成分のうちのナトリウムが高温下で、土の珪酸分と結合して釉を生成するのである。

## 保男陶芸、先祖の地萩へ御見へ —大和保男の歴史的背景—

河野良輔

日本工芸会山口支部常任顧問（前山口県立美術館長）

この春大和保男は、六期十二年間勤めた日本工芸会理事と、日本工芸会山口支部幹事長の職を後進に譲り、組織運営の苦勞からやっと解放され、サテこれから、いよいよ作陶三昧の日々をと、これ迄使って来た窯も大改造をした矢先、奇しき因縁ともいうべきか、かねてよりユニークなギャラリーとして知られる、萩市呉服町の彩陶庵から請われて、近作の一部を展示することになったという。

大和窯は源(もと)を正せば萩が故地、しかも先祖十一代迄の歴代は、萩城下の呉服町でなりあいを立てていたのである。

これまで大和保男は、先祖の故地萩で自作を展示することは無かったことである。

この度の彩陶庵での御目見え展は、今年が大和保男の再出発ともいうべきエポックメイキングを祝うものとして、私は慶び度い。

### 大和家と萩城城下の呉服町

現代萩焼を代表する一異彩大和保男は、そのユニークな創作活動によって知られるが、祖父の大和作太郎がいまから百十年前、萩の松緑窯をたたんで山口へ出て、宮野に蒔いた松緑焼の種を、いま山口萩焼として開花定着させるに至った一大功勞者であることを、人は余り知らない。

大和家は、その菩提寺である萩市古萩(ふるはぎ)の長寿寺の過去帳によれば、江戸時代のはじめ萩城開府以来、代々大和屋を号して呉服町でなりあいを立てて来た旧家で、先祖大和屋九郎工門以来幕末期に及んで十一代大和屋弥五郎の時、呉服商のかたわら、文化、文政期に小畑地方に半磁器土を使って勃興した小畑焼の一つ泉流山窯に従事したことから、その長男として安政二年(一八五五)呉服町で生まれた作太郎は、呉服商を廃して陶工の道を進むこととなったのである。

### 大和作太郎と東光寺焼

作太郎のやきもの修行は、その少年期において、明治維新後の旧藩御用窯三輪家への弟子入りからはじまり、当主八代雪山(泥介)の薫陶よろしく、少年時代既に名工の名をほしいままにしていたということである。

ちなみに三輪雪山は、幕末の青年期に一時高杉晋作の奇兵隊に身を投じたほどの客気剛直の士で名工としていまに語り継がれているが、作太郎はこの厳しい師匠に余程見込まれていたものか、明治十四年(一八八一)に開窯された東光寺焼の職長となったのである。

東光寺窯は、藩主毛利家の菩提寺である東光寺の傍に設置されたからの名称で、明治十年代には城下町に十一を数えるほどの陶磁器窯が勃興し、それらの新興陶磁窯は、白磁器を主とする日用雑器の他に、大道土を主原土とする萩焼の茶器も焼いていたが、故山本勉弥翁によると、東光寺焼は当時俸禄を離れた旧藩士の授産事業を目的として設立された尚象社の経営によるもので、その経営者の一人に三輪雪山が居り、大和作太郎は二十六歳にして多くの離禄士族を統率していたものの、明治二十年(一八八七)には廃窯のやむなきに至っている。

### 松緑焼と作太郎の山口進出

東光寺焼廃止後、その頃吉田松陰誕生地の近くに居住していた作太郎は、自宅の傍に窯を構築し、松緑の雅号を以って松緑焼と称した。

松緑の名の由来は、吉田松陰先生にちなんだものと思われるが、当時既に彼が作家としての自覚を懐いていたことを伺わせるものであり、この松緑窯の遺作には松緑の銘印の跡を見せているのである。しかしこの萩の松緑窯も開窯僅か三年の束の間のこと廃止するに至り、明治二十三年(一八九〇)作太郎(松緑)三十五歳の時、一家を挙げて山口へ進出することとなったのである。

### 山口の松緑焼(宮野焼)

松緑・大和作太郎の山口進出は、当時山口町下堅小路で萬代彦七が創業した山口焼の職長として招聘されたことによるものであった。

この時の一家挙げての山口引越には、当時八歳の長男正一、六歳の次男春信の二人の兄弟が、交替で生まれただばかりの五男の吉孝を背負って、萩から山口への険峻な八丁峠を越えたという、けなげなエピソードがいまに大和一族の間で語り継がれている。

山口焼では、萩焼に類したもの他、繪薩摩も焼いたが、その頃山口高等商業学校の校長で陶磁器に造詣の深かった横地石太郎氏の指導もあって、宋磁や高麗青磁風のものまで多種多様に亘っていた。

この山口焼の職長も僅か二年で辞した大和作太郎(松緑)は、明治二十五年(一八九二)良質の陶土のある隣村の宮野村大山路(現山口市宮野大山路)に、念願の独立自営の窯を構築し、松緑焼あるいは宮野焼とも称して創業するに至ったのである。松緑・大和作太郎三十七歳の時で、いまにして思えば、山口萩焼のはじまりともいえるべきことであった。

大和作太郎はこの宮野の松緑窯で、大正七年(一九二一)六十六歳で生涯を終える迄の約三十年間、宮野付近の地土(じつち)を巧に使いこなして、萩東光寺窯時代に修得した「石焼き」と称する磁器系のやきものや、色絵付け、あるいは山口の近くに産出する大道土を主原土とする萩焼系の茶器等、実に多種多様な独特の松緑焼(宮野焼)を焼き続け、晩年には不幸にも脳硬塞に冒されるところとなったが、作陶の意欲は衰えを知らず、左手の不自由にもめげず、右手一本で茶碗を挽くという凄じさで、その逞しいフロンティア精神を發揮した波瀾の陶工人生を終えたのである。

いま、その萩焼とも一味違った風趣を見せる数少ない遺作に、萩焼本来の茶陶にも、また宮野地方の地土を使った石焼きの日用雑器等にも、厳しい職人芸をうかがわせる轆轤技術の確かさと、重厚にして洒脱ともいえるべき作風には、目を惹き着けられるものがあり、まさに山口萩焼の開祖たるにふさわしい名工であったということが出来る。

### 作太郎以後の松緑焼の分窯

大和作太郎は、七人の男子と二人の女子とに恵まれた九人の子福者であった。

萩在住時代に、旧藩士森永家から入った妻女は、内助の功極めて厚く、苦しい家計のやり繰りの中から、作太郎の跡の松緑窯を嗣いだ三人の男子以外の男女には、当時としては珍しく、すべて中等教育や大学教育までも受けさせ、二人の女子も山口高等女学校や室積みの女子師範学校に進ませたほどの、教育熱心な賢夫人であった。

松緑窯の家業は、長男の正一と次男の春信、そして五男の吉孝の三人が共同して窯を襲ぐ

が、長男正一は再び萩に戻り三輪窯へ弟子入りする。

父作太郎は八代雪山に師事したが、息子の正一は九代雪堂に師事し、後に三輪窯十代を嗣ぐ休雪(後の人間国宝休和)と共に修行したということで、いつも師雪堂の魚釣りのお供をさせられていたと、後年息子達に話して聴かせていたという。

次男の春信は、青年時代一時京都で銀行に勤めた経験から、作陶のかたわら松緑窯の外交、販売、経理を担当したということで、営業面で大いに貢献するところがあったと思われる。

松緑焼後継者の三子の中で末弟の吉孝は、明治四十四年(一九一一年)二十歳の時、山口県から選抜せられて九谷焼産地の金沢の、石川県立工業学校窯業科に入学を果たし、成績抜群であった彼は、大正四年(一九一五年)の卒業まで終始特待生であったと、息子達に語り継がれていたという。

こうして松緑焼(宮野焼)は、息子の正一、春信、吉孝の三兄弟によって、各自が松緑を号して引き継がれるが、昭和十年代の初期に、三子共同の松緑窯から三人はそれぞれ分立し、自分の名を冠して松緑窯を名乗ることとなった。

その三子の松緑も既に遠く、現在では作太郎の孫の三世代、さらに曾孫の四世代達がつぎつぎに分窯し、正一窯が三窯、春信窯が三窯、吉孝窯が一窯と、合わせて七つの松緑窯が分立するに至り、その昔の松緑焼(宮野焼)が、いまでは「山口萩焼」として定着し、世の声価を得るに至った百年の歩みを顧(おも)う時、萩焼四百年の歴史において、松緑・大和作太郎の存在を更めて見直すべきことを痛感させられると同時に、いま「山口萩焼」を世に認知させ、定着せしめる上で、絶大な原動力ともなった作太郎の孫大和保男の陶芸活動を見過ごすわけにはいかない。

### 大和保男の陶芸と山口萩焼

その卓越した造形力と、新鮮な造形感覚とによる斬新な創作活動を展開して、現代萩焼に異彩を放つ大和保男は、昭和八年(一九三三年)、祖父作太郎の松緑窯を継承する山口市宮野大山路の窯、林椿庵・大和春信松緑の次男として生まれた。

その頃の松緑焼(宮野焼)はといえば、昭和初期の不景気にさらされ、萩や深川三之瀬の萩焼でさえ苦境にあえいでいた時期でもあったから、まして名もない田舎窯のこととて、おして知るべき有様であったし、つづいて戦時中の人手不足から、敗戦後の社会経済の混乱変動の時期に成長した彼は、子供の頃から家業の手伝いに明け暮れ、中学時代には既に一人前の窯場職人に勝るとも劣らない轆轤技術を身につけて、小手慣らしに毎日三百個の湯呑を挽いていたという。

しかし青年期に入ると、茶陶を本命とする萩焼の伝統に強く反撥して京都に遊び、その後は前衛的な創作活動を展開して日展系萩焼の旗手として脚光を浴びていた彼が、不惑の年を境に、伝統に回帰して日本伝統工芸展に投げ、折しも「炎箔」と称する塩釉を駆使して、独特の技法で世の注目を惹いた時期は、丁度わが国経済の高度成長期に伴って興った茶道ブームと、焼きものブームに重なる萩焼ブームの時期でもあった。

また生来の反骨精神から、とかく因習的ともいえる茶陶の萩焼に、彼の斬新的な新風を注入し、陶画や陶壁画というような、従来の萩焼では前人未踏ともいべき分野にも踏み込み、ひたむきな勁(つよ)さを秘める「保男陶芸」ともいべき幅広い独自の芸域を切り拓(ひら)いて、昭和六十三年(一九八八年)には山口県指定無形文化財萩焼の技術保持者の認定を受けるに至っている。

その後も日々新たな創作活動は幅広く展開されて来たが、その五十余年に亘る逞しい創作の軌跡は、戦前の一田舎窯に過ぎなかった松緑焼(宮野焼)をして、大和保男の名声とともに世にアピールする結果となり、彼の業績が、「山口萩焼」を普及定着させるに大いに預かって力となって来たことを決して見逃してはならないし、祖父作太郎の宮野に蒔いた松緑焼の種子が、いま百年にして孫の保男により、「山口萩焼」として開花したと見るのは私ひとりだけではあるまい。

彼はまた既にはやくから、山口萩焼の普及振興のために、山口地方に蟠居する大和一族の松緑窯および周辺諸窯の融和団結にも心を砕き、自分の陶芸活動を通じながら「山口萩焼作家協会」の結成、発展に情熱を注いで来たことも見落としてはなるまい。